

後援会通信「グローブ」秋号

GROWTH

—大学と家庭をむすぶ—

2012 Autumn

vol.

21

リレーインタビュー

12,000の瞳、 12,000の輝き。

series 3



学生時代は、多くのことに出会い、
気づき、学んでいく成長の季節。
その姿には
一括りに語ることのできない
豊かで多彩な個性の輝きがあります。
今、興味をもっていること、
打ち込んでいるもの、将来の目標、
そして夢。
東北学院大生一人ひとりの
飾らない等身大の姿をご紹介します。

マーチングバンドの軽やかな音楽にのせて、見えな
い糸がついているかのように自在に操られるバトン、
そしてきらびやかなコスチュームやメイク…ひと目で
憧れを抱くお子さんも多いのではないのでしょうか。松
本さんもその一人。「私は記憶にないのですが、3歳
の時、『私もやってみたい』と母に言ったそうです」。
それから週数回の自主練習と土日の集中レッスン、
というバトントワリング漬けの日々が始まり、高校生
になるとソロとして全国大会に出場する実力を蓄え
ました。

しかし、その華やかな活躍の陰には、大きな挫
折もあったのです。「高校2年生の時に出了大会
で、衆目の下、バトンを落とすミスをしました。すぐ
にリカバーされるべき失敗ですが、頭の中が真っ
白になってしまいました」。その時の情景が頭の中
に刻まれ、しばらくはネガティブな思いに苦し
められることに。周りの人のアドバイスやイメージ
トレーニングが奏功したのは3回目の大会から。
「やっと平常心で臨めるようになりました」。
大きな壁を乗り越えた成功体験は、松本
さんの今後を支える力となってくれることで
しょう。

経済学部 経済学科3年
松本 さやかさん

3歳から生活の一部になったバトントワリング。
大会でのミスを乗り越えて、大きく成長、
その成功体験はこれからの人生の糧に。



●現在は、バトントワリングの学び舎(PL宮城MBA)で幼児~小中学生の指導をサポートする役としても活躍。「成長していく様が間近で見られるのはうれいですね」。

CONTENTS

01 GROWTH vol.21

01 12,000の瞳、12,000の輝き。
リレーインタビュー・3

03 SPECIAL ISSUE [特別企画]
TG座談会：工学部で学ぶということ。

05 後援会総会報告

06 地区後援会開催報告

07 CLOSE UP [同窓生インタビュー]
スポーツデポ 高松快石店 横山 裕亮さん

09 ゼミ・研究室探訪
伊鹿倉 正司ゼミ



●将来のオリンピック種目入りを目指すフロアボール。もちろん社会人になってからも続けますと話す森さん。「配属された町にチームがなかったら、僕がつくります!」。

「フロアボール」という競技をご存知でしょうか。これはスティックを使って、プラスチック製のボールを操り、相手チームのゴールに入れて得点を競い合う室内団体競技で、アイスホッケーの「床版」にも例えられます(ルールは若干異なる)。スウェーデンで生まれ、日本へは1970年代後半にやってきた比較的新しいスポーツです。

「高校時代はずっとアイスホッケーをやっていて、大学に入ってからフロアボールを始めました。「氷上の格闘技」と言われるアイスホッケーと異なり、激しいボディコンタクトはありませんが、40×20mのコートを選手が全力で疾走する気迫と運動量、スピード感は迫力満点です」。森さんは、今年5月プラハ(チェコ共和国)で開催された『第5回世界学生フロアボール選手権大会』に日本代表として出場。「残念ながら、最下位という結果に終わり、世界との壁を見せつけられました。欧州では知名度も高く、選手層も厚い。日本はまだまだ途上国、今後は僕たちが引っ張っていかなければならないと思っています」。フロアボール、みなさんもこの機会にぜひご注目ください。

森 康平さん

工学部 環境建設工学科 4年

学生日本代表として世界へ、
そして痛感させられた実力の差。
日本フロアボール界をけん引する決意を新たに!

本学では毎年、新入生向けのオリエンテーションを実施しています。そこでは高校時代とは異なる大学生活を理解していただくための説明会などが行われますが、伝統的に新入生の世話役をグループリーダー(先輩学生)が担っています。入学当時の佐藤さんの心を揺らしたのが、一人のグループリーダーが発した言葉でした。「何かひとつでもいいから、胸を張って誇れることに自主的に取り組んでください」—この助言を受けて、自身もグループリーダーとして、そして200名を超える大所帯のスポーツ



サークル[VS(バーサス)]の幹事として、仲間や後輩たちのサポートをしたり、先導する役割を果たしてきました。「こうした経験は“自分を再発見”することにつながりました。たとえば僕は、自分のためというよりは誰かのために計画したり、活動したりすることが好きなんだとわかりました」。楽しみを共有する仲間たちが増えていくとともに、視野もぐんと広がったと佐藤さん。「後輩には、興味のあることに一歩踏み出す勇気を持ってほしいですね」。そこには豊かな経験を通じて成長した自負がのぞいています。

●写真は、スポーツサークル[VS(バーサス)~All ROUND SPORTS~]の今年の夏合宿(3泊4日)の様子。取り組む種目は、バスケット、バレー、サッカー、野球、ソフトボール…と多種多形。



佐藤 利樹さん

教養学部 地域構想学科 3年

グループリーダーとして、サークルの幹部として、仲間や後輩と楽しみを共有。多くの体験を通じて、新しい自分を発見。

11 倶楽部拝見
陸上競技部女子駅伝チーム

12 CAMPUS NEWS
講演:「原発事故と東北再生」

13 学務部より
学生部より
就職部より

微風に揺れる木々の葉も徐々に色づき始め、秋の深まりを感じさせる時節となりました。このたび、後援会通信「GROWTH(グロース)」の秋号が完成いたしました。東北学院大学後援会の会員の皆さまにお届けできますことを感謝しております。5月の後援会総会、7月~8月の地区後援会も無事に終了、学生が円滑に勉学や課外活動に励むための支援も滞りなく進んでおります。今後も大学と家庭の架け橋となるような誌面となることを願っております。

TG座談会 工学部設置50周年
工学部長×工学部学生

工学部で学ぶということ。

～形式知と経験知を併せ持つ、社会に必要とされる工学技術者に～

東北学院大学に工学部が誕生してから50年。
その間の科学技術の発展進歩は、社会や暮らしを様変わりさせてきました。
しかし時代は移れど

「人類の幸福と望ましい環境の創造に必要な工学技術を理解し、
自ら思考できる人物を育成する」という工学部スピリットは変わることなく、
“平成生まれ”の学生さんにも受け継がれているようです。



明確な動機・理由が、学びの原動力。

伊達 工学とは、自然科学を基盤として人間と社会に有用なものをつくり、それらを実際に利活用するための仕組みを構築する学術領域です。近年再評価されている“ものづくり”を根底から支える学問・研究ともいえますね。さて、みなさんはどのような理由で本学の工学部を志されたのでしょうか。

石川(奈) 私はもと



機械知能工学科1年
石川 奈保子さん

感や充足感、さらにはがんばろう!という気持ちにさせてくれます。

中鉢 高校生の時から建築・建設に興味があり、建造物として形に残るものをつくったり、社会や暮らしに直接役立つ仕事に携わりたいと考えてきました。入学後は専門課程での学びを通じて、環境に配慮した次世代の建物や住まいの研究が進んでいることを知りました。本学を選んだのは、進みたい学科があったからですが、何よりも歴史と伝統があり、東北を代表する私立大学であるという点が決め手になりました。
石川(雅) 僕たちは、物心ついた時から傍にはデジタルデバイスがあり、その進化と

ともに成長してきた世代といえます。僕はどちらかというと機構やシステムに興味を持つタイプで、携帯電話やデジタル音楽プレイヤーの中身がどうなっているか、どんな仕組みで機能しているのか、気になって仕方がありませんでした。使わなくなった家電を譲り受けて、分解するのが楽しみで…元には戻せませんでした(笑)。今は各自に与えられる個別の実験ブースで電子工学実験を行い、長年の疑問を一つひとつ



電気情報工学科4年
遠藤 あかねさん

クリアにしています。
遠藤 「電柱に登って作業をしているユニフォーム姿の人がカッコいい! 私もあの仕事がいい」と思ったのが、私のキャリアデザインの始まりだったかもしれません。そんな職業観の原風景を追い続けて、というか自分の姿を重ね合わせて、工学部を選び、進路を決めてきました。幸いにも電気設備会社からの内定をいただき、“電柱に登る作業着姿”に一歩近づきました(笑)。とてもうれしいです。

伊達 初志貫徹というわけですね。遠藤さんの颯爽としたユニフォーム姿を見て、す

てきだなと思ってくれる女子生徒/学生がいれば、職業選択の多様性につながっていくのではないのでしょうか。みなさん一人ひとりの姿が、後進のロールモデルになっていきます。

工学分野に待望される 女性目線・感性。

石川(奈) 今、先生から女子学生の話が出ましたが、機械知能工学科では1学年120名のうち、女性は6名だけです。もっと仲間が増えればいいなと思っていますが。**伊達** 資質や志向性があるのに、女性が理系に進むことを躊躇させるような先入観や障壁があるのであれば、私たち教育関係者はそれらを取り除く努力をしていかなってなりませんね。工学は、老若男女によって構成される社会や暮らしに深くコミットする学問研究であるにもかかわらず、長らく男性だけの目線・感性によって担われてきたという経緯があります。女性研究者/開発者の参画が待望されている分野ですね。4年生の遠藤さんはどんな研究をされていますか？

遠藤 私は、発電装置に展開する磁気歯車の効率化についての研究に取り組んでいます。テーマは一方向的に与えられるのではなく、自分の興味を元に、自由に選ぶことができます。そして疑問や問題点を見出し、問いを立て、それに向かって考察・研究していきます。もちろんわからないところは先生がサポートしてくださいますが、根気強く自分自身で考え抜く力が養われたように思います。

伊達 知識や技術は、積み上げ方式で修得/習得されるものと私たちは考えています。1年から3年生までは理論や実習を積み重ねてしっかり骨格を形成し、4年生でひとつの独立した研究テーマに取り組んでいきます。自ら行動する能動的な姿勢は、さまざまな“気づき”と広い視野を涵養することにもつながっていきますね。

貴重な4年間、 目的意識をもって送りたい。

石川(雅) 大学は学位だけを取りにくところではないと思っています。勉強やス

ポーツ、サークル、アルバイト…何でもそうですが、やる気と積極性の有ると無しとでは、自分の成長の度合いが大きく変わってくると実感しています。社会に巣立つ前の4年間は、さまざまなことにチャレンジできる貴重な時期だと思います。

中鉢 僕も同感です。受け身では何も始まらない。大学でしかできないことに進んで取り組んで、悔いのない学生生活を送りたいです。と言っても、初めからそう考えていたわけではなく、先輩からのアドバイスを聞いて、納得できた部分が大きかったと思います。助言に対して、謙虚に耳を傾けることも大事ですね。

石川(奈) 私はやってみたくがたくさんあってサークルを掛け持ちしています(笑)。大学では、いろいろな出会いと交流の機会があるので、一つひとつを大切に、友だちを増やしていきたいです。

伊達 みなさん漫然と日々を過ごすのではなく、目的意識を持って大学生を送っておいでのようですね。私は大学での学びの意味と意義を“観光バス”に例えることがあります。例えば富士山へは自動車やバスで五合目まで登ることができます。車の中から山頂を眺めて、富士山を知ったような気になる…でも実際には足を踏み入れてもないし、山頂までの険しい道を額に汗して登ったわけでもない。真に富士山を“知った”わけではないのです。学びもそれと同じで、自分の身体を通じて獲得したも



電子工学科2年

石川 雅人さん



環境建設工学科3年

中鉢 拓哉さん



工学部長/教授・工学博士
伊達 秀文

1949年仙台市生まれ、1967年宮城県仙台第三高等学校卒業、1971年東北学院大学工学部卒、同年助手、1979年講師、1985年助教授、1992年教授。
専門：個体力学
工学博士(東北大学)

※文中、敬称略

次第

- 日時** 平成24年5月26日(土) 10時55分
- 会場** 東北学院大学泉キャンパス礼拝堂
- 司会** 後援会事務局長 門脇 邦知

- 1. 開 会 司 会 者
- 2. 聖書朗読並びに祈禱 宗 教 部 長 佐々木 哲夫
- 3. 挨拶 会 長 丸 森 仲 吾
大 学 長 星 宮 望
- 4. 議 事
 - (1)平成23年度後援会庶務報告について 庶務担当理事 高 橋 祥 允
 - (2)平成23年度後援会収支決算報告並びに
会計監査報告について 会計担当理事 小 濱 良 雅
監 事 浅 野 ひ と み
 - (3)東北学院大学後援会会長の選任について 庶務担当理事 高 橋 祥 允
 - (4)平成24年度後援会事業計画(案)について 庶務担当理事 高 橋 祥 允
 - (5)平成24年度後援会収支予算(案)について 会計担当理事 小 濱 良 雅
 - (6)その他
- 5. 後援会役員紹介 司 会 者
- 6. 閉 会 同 上



議長を務める丸森会長



総会の様子

**泉キャンパスに、約1,200名の保護者をお迎えし、平成24年度の後援会総会並びに
大学開放プログラムを開催いたしました。総会で審議されました内容は次のとおりです。**

(1)平成23年度後援会庶務報告について

高橋祥允庶務担当理事より、役員人事、平成23年度役員会、平成23年度後援会総会並びに大学開放プログラム、平成23年度地区後援会実施状況について報告があり、原案通り承認されました。

**(2)平成23年度後援会収支決算報告並びに
会計監査報告について**

小濱良雅会計担当理事より報告があり、原案通り承認されました。浅野ひとみ監事より帳簿等が正確に整備されていることについて報告がなされました。

(3)東北学院大学後援会会長の選任について

高橋祥允庶務担当理事より、東北学院大学後援会会長の選任について、引き続き丸森仲吾会長が推挙され、満場一致で選任されました。

(4)平成24年度後援会事業計画(案)について

高橋祥允庶務担当理事より、平成24年度後援会総会、平成24年度地区後援会について説明があり、原案通り承認されました。

(5)平成24年度後援会収支予算(案)について

小濱良雅会計担当理事より説明があり、原案通り承認されました。

大学開放プログラムでは、毎年好評いただいております「学生の就職を考えるセミナー(講師:園田雅江氏)」のほか、経済アナリストの森永卓郎氏を講師に招いて「保護者と学生のための教養セミナー」を開催いたしました。会場の礼拝堂はほぼ満席となり、盛会裏に終わることができました。



学生の就職を考えるセミナー

保護者と学生のための教養セミナー



7月～8月にかけて、北は札幌市から南は東京都までの全20地区に本学教職員が出向き、東北学院大学の近況のご報告や個別面談などを行いました。

さらに、今年度は、キャリアカウンセラーなどの専門の方を招いて、全地区で「学生の就職を考えるセミナー」を開催いたしました。昨今の就職状況について分析し、学生はどのように準備をしていけばよいのか、保護者はどのように関わっていけばよいのかなどについての内容で、保護者の方々の関心も強く、大変好評いただきました。次年度以降も、継続して開催していく予定ですので、保護者の皆さまのご出席をお待ちしております。



学生の就職を考えるセミナー



北上会場の様子

総会・地区後援会に参加された保護者の皆さまの声を一部ご紹介いたします

[総会]

- 森永さんのお話はわかりやすく、難しいと思っていた経済の話も、ユーモアもまじえての講演だったので、話に引き込まれました。(電子工学科2年)
- 普段聴くことの少ないバイオリンの生演奏は、心が洗われるようで、とても良かったです。(歴史学科3年)
- 園田さんの講演を拝聴しましたが、就活の大変さが身にしみる内容で、早めの対応が必要と強く感じました。(経営学科2年)
- 出席者が少ないのが気になりますね。大学との連携を密にするためにも、より多くの参加者があってほしいと思います。(経営学科4年)

[地区講演会]

- 3年生の段階で就職について色々悩んでいる事もあったので、就職セミナーは、大変参考になりました。(電気情報工学科3年)
- 就職セミナーの講演内容について、地方(東北)の大学にとって、大手企業の存する東京圏での就職活動の実態情報提供があれば尚良かった。(経営学科2年)
- 大学紹介ビデオで、初めてキャンパス内の風景を見る事ができ、少しですが子供達の学生生活等を見る事が出来て良かったです。(機械知能工学科1年)
- 先生方と話しをする機会は殆ど無いので、貴重な話しを聞かせて頂き少し安心致しました。(環境建設工学科3年)
- 昨年より相談してもゆっくり面談できて良かったので、来年ももっとわかりやすい説明を、期待しています。(法律学科3年)

後援会では、在学生の円滑な学生生活と大学の充実発展に寄与するため、“大学と家庭をむすぶ”をモットーに、各種事業を展開し、以下のような助成をおこなっております。

体育会、学生会、文化会等の 課外活動団体への助成

東北学院大学 緊急給付奨学金への助成

東北学院大学給付奨学金への助成

就職活動に対する助成

合同企業セミナー開催、職業人による
トークイベント開催、面接フォローアップ講座開催、
企業研究講座開催、エントリーシート添削講座開催など

震災支援特別助成

東日本大震災緊急給付奨学金への助成



新天地に活躍の場を求めて。

バスケットボールが結んだ、
スポーツ業界及び香川との縁。

22年間生まれ育った仙台から、遠く離れた香川に移り住み早6年。横山さんはスポーツデポ高松伏石店で多忙ながらも充実した日々を過ごしている。きっかけは大学時代まで没頭したバスケットボールだった。「入社後間もなく、今働いている店舗が改装してバスケット関係を強化するという事になったんです。『それなら』ということで自分の名前を挙げてもらい、以来ホームグラウンドは香川です」。元々描いていた将来像はシューズ業界で働く姿。実際、就職活動に際してもその分野の企業から内定も得ていた。しかし門を叩いたのはシューズを含めより領域が広いスポーツ業界。やはりと言うべきか、そこにもバスケットボールへの思いが関係していた。「当初はシューズありきの方向性でしたが、スポーツメーカーとの関わり、バスケットの普及への関心が徐々に深まって。その意味でこの会社はドンピシャだと感じたんですよ。あの時の判断は間違っていなかったと思います」。業界最大手のアルペングループには大きく3つの部門があるが、横山さんは運良く希望していた部門、つまりはスポーツデポへの配属が決定。現在は球技全般を担当し、接客や売り場づくり、新商品の仕入れまで業務は多岐に渡る。当然、仕入れにはその時々々の流行や傾向の分析が必須であり、横山さんはそれを足を使ってリサーチしている。「中学校や高校にお邪魔して意見を聞いたり、大会をのぞいたり。どんなスタイル

やカラーにニーズがあるかチェックしています。もちろんメーカーの戦略も加味しつつ、売り場や仕入れに反映させる。それも醍醐味のひとつですね」。

地道にキャリアを重ね、
いずれは企画を業務の中心に。

通常業務だけでなくリサーチにも追われるタフな毎日だが、自ら望んで飛び込んだ業界。苦労もあるが、やりがいはいずれそれを容易く上回る。「例えば自分がユニフォームのオーダーを受けたチームが全国大会に出場したり、そのユニフォーム姿が雑誌に掲載されたり。やっぱりうれしいですよ。配色は、書体は、マークは。あれこれ相談してデザインしたものには思い入れがありますし。それから新商品をいち早く確かめられるのも特権ですね」。スポーツデポではプライベートブランドの開発・販売も手掛けており、店舗販売を下積みとしてゆくゆくは比重をマーチャンダイジングに。そんな青写真も描いている。「今でも商品企画やデザイン提案はしていますが、もっと深く携わりたい思いはあります。メーカーともディスカッションしながら、限定カラーなどを生み出せたら楽しいでしょうね」。

今でこそビジョンが明確な横山さんだが、学生時代はそこまで将来を意識した時間の使い方ではなかったと振り返る。マーケティングの勉強しかり、途中で諦めてしまった教員免許資格もそう。最近になって「あの時もう少し…」と思うところもあるという。だからだろうか、最後に訊いた後輩へのメッセージは、かつての自分に語りかけているように聞こえた。「もちろん勉強が大前提ですが、サークル活動に時間を費やすのもいいし、趣味の延長でバイトをしてキャリアを積むのもいい。将来を見据えてチャレンジを続ける中で進むべき方向性が見えてくるはず。それをできるだけ早く見つけて、残された時間をどう有意義に過ごすか、考えてほしいですね」。

横山さんも企画・デザインに携わるプライベートブランドが、「IGNIO(イグニオ)」と「TIGORA(ティゴラ)」。野球、サッカー、テニスなど幅広いカテゴリをカバーしており、アイテムもTシャツをはじめとするウェアからシューズまで多彩。全身トータルコーディネートが可能となっている。



スポーツと対峙する 大いなる充足感。



スポーツデポ 高松伏石店

よこ やま ひろ おき
横山 裕亮さん

宮城県泉松陵高等学校から東北学院大学経済学部
経済学科に入学。2007年4月に(株)アルペン入社。
研修、青森県への店舗配属を経て、同年8月より香川
県の現店舗に勤務。

加速するグローバル化、 国境なき金融の世界を探る。

経済学部経済学科 伊鹿倉 正司 ゼミ

～ますます進むグローバル化の流れ。中でも最も私たちの暮らしに影響を与えているのが、経済＝お金の流れです。今回は「国際金融」をご専門とする伊鹿倉先生にインタビュー。震災後の新しい取り組みについてもお話しいただきました～



伊鹿倉正司 准教授 / 1975年京都府宇治市生まれ、1994年宮崎県立都城高等学校卒業、2004年九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了(博士(経済学))、同年九州大学大学院経済学研究科助手、2005年東北学院大学経済学部講師、2007年より現職。専門は金融、国際金融。

銀行は「経済の血液=お金」を循環させる “心臓”

最近、グローバル化、グローバル化という言葉、新聞やテレビ等で見聞きされる機会も多いと思います。これは社会的あるいは経済的な関連が、国家や地域などの境界を越えて、地球規模で拡大していく様子をいいます。ネガティブな例としては、リーマンショックを端緒とした世界金融危機(世界同時不況)が挙げられるでしょう。「古くから金融はグローバルな面を持っていましたが、昨今のようなスピードと大きな影響力をもって伝播していく現象は、これまで我々が経験してこなかったものです」とお話しくださる伊鹿倉先生のご専門は「国際金融論」。まさに国境を越えて活動する金融機関、お金の取引に関する研究に取り組んでおられます。主な研究対象地域は、中東欧(冷戦時代に社会主義体制下にあった国々)です。

「中東欧諸国の多くは、ここ20年の間に自国の銀行を持つに至りました。金融サービスの内容は、西欧諸国で提供されているものと遜色ないものですが、市場や顧客への対応などといった金融技術やシステム面で課題も多く見られます。それらはかつての日本が抱え、英知を集めて解決に導いてきた問題と共通する点が少なくないのです。もちろん社会状況や時代性は全く異なる

りますが、明治以来の金融の歴史をもつ立場から提言できることがあると考えています」と伊鹿倉先生。「お金は“経済の血液”に、銀行は“経済の血液を循環させる心臓”にしばしば例えられます。いかにして強い心臓をつくり、適切で良好なマネー・フロー(資金循環)を形成するのか、が一国の経済にとって非常に大事になってくるわけです」。スムーズな血液循環が、健やかな身体を支える…私たちの体の仕組みと同じですね。

師の導きの下、 国際金融研究の奥深さに開眼。

さて、伊鹿倉先生はいつごろから経済学に興味を持ち、研究者という仕事を意識されたのでしょうか。「身近なロールモデルとして父の影響もあり、ずっと建築家になりたいと思っていました。でも高校2年になり、真剣に将来の道を考えるようになると、建築分野

はちょっと違うな、と(笑)。たまたま図書館で手にした平易な経済学の本を読んで、おもしろそうだと俄然興味がわいてきました」。大学は経済学部へ。「卒業したら銀行に就職したいとは考えていましたが、熱心に勉強ばかりしていたわけではありません。これはあまり大きな声では言えませんね(笑)。ですが私にとって幸いだったのは、ゼミの先生の導きによって、国際金融の面白さと奥深さを知ったことです。(その後)大学院に進学し、そこで研究者を志す気構えができました。恩師に感謝するとともに、私も学生さんに気付きや刺激を与える存在でありたいと思っています。「金融は、複雑すぎてわからないことが多いのです。でもそれだけ“材料”には事欠かない、おもしろい研究対象であるということ。知的好奇心と探究心を鼓舞してくれるテーマに出会えることは、研究者としての喜びです」。

海外を含めた他地域との結びつきに 活路を見出す。

グローバルな視座のもと、金融活動と金融市場の現状把握と包括的分析に取り組まれてきた伊鹿倉先生ですが、東日本大震災後は、専門家の立場から東北の金融業や地元企業への支援を始めています。「長引く景気停滞や高止まりの円相場、人口減少局面を受けた国内市場の縮小などにより、日本の企業は海外、特に成長著しいアジアへの進出をこれまで以上に推進しています。しかし東北企業の海外進出意欲は非常に低いものに留まっています。その背景には様々な事由が横たわっていますが、金融機関によるサポートが強化されれば、海外進出のハードルも低くなっていくのではないかと考えています。そこで伊鹿倉先生は、現況分析と今後あるべき支援策などについて、専門家を集めて議論する公開シンポジウムをコーディネートしています(右記をご参照ください)。

「仙台は“ミニ東京”“支店経済の街”などといわれる通り、これまでは東京との紐帯を強めることで経済を発展させてきました。しかし、これからは東京だけでなく、海外を含む他地域との結びつきの中に活



現地調査の折は、銀行の外観を撮影してから、中に入り、ロビーの椅子に腰を落着け、テラーと顧客のやりとりをじっくり観察。「怪しまれることもたびたびですよ(笑)」。写真はチェコ共和国の首都プラハの中心部にあるGEマネー銀行の支店。GEマネー銀行は、アメリカ最大の総合家電メーカーGE(ジェネラル・エレクトリック社)の金融子会社。

写真左: 大学院生時代に留学(マールブルク大学)していたドイツのマールブルク。ここは数々の童話を著したグリム兄弟が学生時代を過ごした街として知られています。

路を見出していく必要があるのではないのでしょうか。慶長18(1613)年、仙台藩主伊達政宗が遣わした慶長遣欧使節の真の目的は、仙台藩とスペインの通商交渉であったと言われます。今こそ政宗“グローバル”スピリットを継承・発揮する時期なのかもしれませんね。

公開シンポジウム

「東北企業の海外進出

—持続的かつ実りのあるものにするためには—

日時: 2012年12月1日(土)

12時30分開場 13時開会(17時終了予定)

場所: 東北学院大学土樋キャンパス8号館5階 押川記念ホール

主催: 東北学院大学 東北産業経済研究所

※申し込みは不要、聴講は無料です。参加ご希望の方は直接会場へ。

MY FAVORITE



花の輪・人の輪・みんなの花展より。
個性をもつ学生さん、後者はまさに一度きりの“ライブ”である授業・ゼミに通じるものがあると思います。

← 私のお気に入り

小原流いけばなを習い始めて6年になります。海外の研究者は日本独特の伝統文化に興味と関心を持たれている方も多く、質問攻めにあいます。ひと通りは説明するのですが、何かひとつ自分が体得したうえで語れるものが欲しいと思っていました。いけばなを選んだのは、母がずっとたしなんでいたせいもあるかもしれませんが、花はひとつとして同じ表情を持つものはありません。いけばなは一期一会。前者は、多様なものがあると思います。

倶楽部 拝見

陸上競技部 女子駅伝チーム



全日本大学女子駅伝、通称「杜の都駅伝」。10月、本学陸上競技部のメンバーが7年ぶりに地元仙台の街を駆け抜ける。「とにかくチームで出場できることがうれしいです。そこを目標にずっと頑張ってきましたし、やっぱり特別な思いがあります」。こう話す女子駅伝チームキャプテンの萩生田さんは昨年、東北学連選抜として大会に出場。とはいえ目標に掲げていたのは東北学院大学の襷をつなぐこと。善くも悪くも切

符を逃した悔しさが、チームをひとつにまとめる契機になったという。「昨年は『いける』と思っていたんですが、そう甘くはなかったです。でも、あれがあったからこそ今年に向けて気持ちをひとつに頑張ることができました」。

今年のチームに突出した実力の持ち主はいないが、それぞれが平均以上の走りを見せるバランスのとれたメンバー構成。そして舞台は地元。コースの試走にも事欠かず、地の利も確かにある。が、当日集うのは全国に名を轟かせる強豪校ばかり。上位を窺うのがいかに難しいかは、これまでの経験を通して本人たちもよく知っている。また、大会出場が決定してからは明らかに周囲からの支援や注目度も違ってきており、感じることもなかった責任も少なからず背負っているという。

徐々にその日が近づくなか、彼女たちはひとつの明確な目標を掲げていた。それは、

笑顔で襷をつなぐこと。「チームとしては初の大舞台で不安もありますが、笑顔で襷をつなぐことがいちばんの目標です。地元の方々の声援を受けながら、気持ちよく走りたいと思います」。母校の名が刻まれた襷で挑む夢の舞台。沿道からの声援を受けながら駆け抜けるその時間、見慣れたはずの仙台の街並も彼女たちの目には特別な景色として映るに違いない。



陸上競技部女子駅伝チーム キャプテン

萩生田 千紗さん

(教養学部 地域構想学科3年)

CAMPUS NEWS



復活と創造 東北の地域力 ～柳田邦男氏を招き～ 「原発事故と東北再生」について講演

本学と河北新報社との連携で、シリーズ企画で開催している「復活と創造 東北の地域力」。第3回目を迎えた今回は『原発事故と東北再生』と題し、9月29日、泉キャンパスの礼拝堂において開催されました。

当日は、多数の地域住民のほか本学の学生も参加して始まりました。冒頭、星宮望学長より「収束していない被災地の復興などについて、皆さまと一緒に考えてまいりたい」と挨拶。続いてノンフィクション作家でありながら東京電力福島第一原発事故の事故調査・検証委員を務める柳田邦男氏を招き、第一部「原発事故と人間」の基調講演が行われました。

柳田氏は電力業界のレベルの問題点と国家政策のあり方、事業計画、技術レベルの思想と発想の問題点などについて解説。不測の事態に備え、対処するために必ず現場に身を運ぶこと、「真実は常に現場で確かめよ」と語り、今後の『生きなおす力』を地域社会や個人・家族と共に求め続けることなどをご講演いただきました。

また、第二部「原発事故の検証と今後」は、パネリストは第一部に引き続き柳田氏と、原発事故における被災地や避難生活を送っている人たちの実態を調査している本学経済学部 齊藤康則准教授、コーディネーターとして河北新報社の編集委員である寺島英弥氏が登壇。それぞれの視点から見た被災地の当時や現在の状況、取り組んでいかなければいけない事柄などについて積極的な意見交換が交わされました。

当初の予定時間を超えてしまうほど、活発な議論がなされた今回のシンポジウム。本学では、共に地域の皆さまと考え、東北の地域力向上に貢献できる場を、これからも継続して開催していきます。



柳田邦男氏



齊藤康則准教授



寺島英弥氏



学務部より

カンニングと学生の声

学務部長

千葉 昭彦

昨今、一部で大学と学生の関係をサービスの提供者と消費者と言った関係でとらえるような風潮がある。もちろん経済の問題としてはその通りなのかもしれないが、教育の問題としては学生は、教職員とともに、大学を構成し、大学をうごかすメンバーである。そこで、学務部としては授業運営や学修環境に関して学生の声を引き出すことを考えている。今回学生に問いかけたのは、「定期試験の不正行為防止」、いわゆるカンニング防止である。カンニングは6世紀の中国の科挙でも記録にあるほど古く、近年ではその「手口」も携帯電話等の使用も含めて多様かつ巧妙になってきている。

このことに関して7月にMy TGUを通じて、学生に意見を募ったところ、短期間にもかかわらず数件の意見書が寄せられた。多くは処罰の厳格化や試験実施条件の改善(座席の間隔を広げるなど)であったが、その中に経済学部3年生から驚くような意見があった。2千字を超える文書では、「大学は知識を増やすだけでなく、知識を使い、疑問を持ち、それを解決する方法を考えるところである。したがって、そもそもカンニングされるような試験だけで評価すること自体が問題である。レポート、発表、小テスト等々の多様な評価の仕方を取り入れる必要がある」と言った趣旨のことが述べられている。

まさに大学が、今、社会から求められている授業設計、到達目標、そして評価方法である。このような意識を持つ学生がいることは何とも頼もしい限りである。

学生部より

躍動する課外活動団体

学生部長

石塚 秀樹

学生部では、充実した生活を送れるよう健康管理、経済的支援などの学生生活をサポートする仕事をしています。特に、昨年の大震災以来、心身の健康管理、緊急の経済支援などが大きな課題となっています。しかし今回は、ここ最近の課外活動団体の活躍ぶりをご紹介します。

まず、第60回東北学生剣道選手権大会、第46回東北女子学生剣道選手権大会が塩釜ガス体育館で開かれ、本学は2年ぶり男女とも優勝、通算では8回目となる見事な成績でした。

そして、第7回東北地区大学野球選手権大会において、本学硬式野球部が初優勝しました。東北福祉大学を準決勝で下し、決勝は八戸大学と対戦し、5対0で完封しました。東北福祉大学、八戸大学とライバルチームを撃破しての完全優勝でした。

第30回全日本大学女子駅伝対校選手権大会東北地区予選会で、本学女子が第2位の成績を収めました。この結果、秋に行われる杜の都女子駅伝に出場することが可能になりました。7年ぶりの快挙です。

また、個人では、工学部環境建設工学科の森康平君が、チェコで開かれた世界フロアボウル選手権大会に派遣され、その活躍によって学長特別表彰の対象になりました。

昨年は震災があり、思うような練習ができませんでした。しかし、練習環境もかなり改善されてきました。今後はこれまで以上の活躍が期待できると思います。お時間があれば、試合の日程などを確認され、是非試合会場へ足を運んで、熱い声援を送っていただければと思います。

回復基調の就職環境

就職部長

前田 修也

文部科学省の「学校基本調査」によると、今年(2012年)春に4年制大学を卒業した学生の就職割合は全国平均で63.9%と、厳しい状況であります。また、民間の研究機関が、大学3・4年生の保護者に行った調査結果によれば、卒業後すぐ就職できるか心配だという回答が約60%にも上った、ということです。本学におきましても、リーマンショック直後は、就職を希望する学生の4分の1近くが未就職のまま卒業せざるを得ませんでした。

こうした中、文部科学省の大学教育・学生支援推進事業(就職支援推進プログラム)に本学就職部の「長期就業を目指した地元企業への就職支援」が採択されました。これをきっかけに、学生に対して、知名度の高い大企業にエントリーする傾向を改め、もっと地元企業に目を向けるようにという取組を重ねてきました。就活学生の大企業安定志向は本学に限ったことではありませんが、仙台圏の地元企業では、東北学院大学の卒業生が数多く活躍しており、彼らの地元経済界における横の連帯・絆の強さと、それを背景にした地域振興への情熱、貢献度の高さは特筆に値します。

それ以来就職部では、地元企業の情報を提供し、かつ就職相談を手厚く行うことによって、本当に自分が目指したい企業はどこにあるのかを学生自らが見出していく支援を継続しました。その結果、文部科学省からはこの取組に対して「総合A」の評価をいただきました。その一方で、単なる大企業安定志向ではない、真に首都圏に出て汗をかきたいと思う学生に対しては、就活応援バスツアーの導入や株式会社文化放送キャリアパー

トナズとの連携など、首都圏での就活に備える対応も取ってまいりました。

こうした取組が効を奏し、東日本大震災による2ヶ月以上の就活中断にもかかわらず、今年(2012年)春の本学卒業生の就職率は83.0%と、前年度比7ポイントもの大幅増となり、ご心配をお掛けしておりました本学の就職環境は、V字回復の基調に乗ることが出来ました。今後とも、就職部教職員一同、就活学生の思いに耳を傾けつつ適切な助言と支援をして参る所存でございます。

後援会ホームページのご案内

東北学院大学後援会のホームページでは、後援会の最新情報をお届けするほか、後援会総会・地区後援会のご案内、後援会通信のバックナンバーなど随時更新いたします。



<http://www.tgu-kouenkai.org/>

平成24年度 東北学院大学後援会 役員名簿

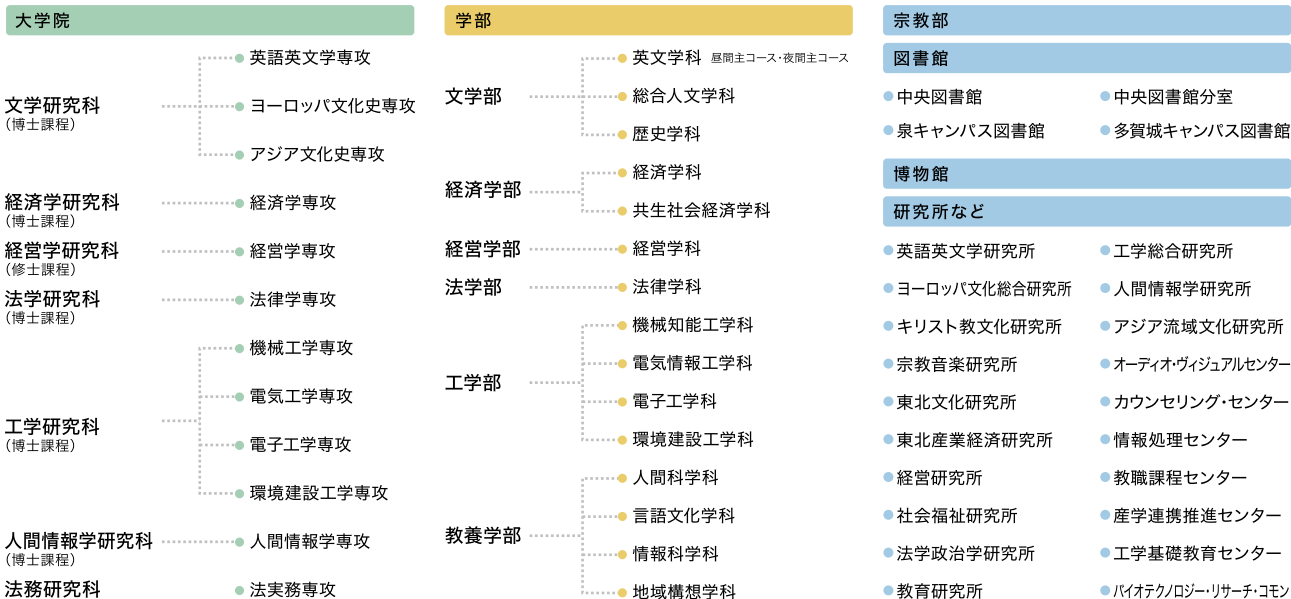
平成24(2012)年4月1日現在

任期(平成22年～平成24年)

- **会長** ……丸森仲吾(仙台市)
- **副会長** ……三島卓郎(仙台市)・後藤久幸(仙台市)
- **庶務担当理事** ……高橋祥允(仙台市)
- **会計担当理事** ……小濱良雅(仙台市)
- **理事** ……寒河江満子(仙台市)・佐久間敬子(仙台市)・村山令記(仙台市)・齋藤靖(仙台市)・今野文昭(仙台市)・庄子真由美(仙台市)・菊地昇(仙台市)・武内宏之(石巻市)・桂久(札幌市)・成田智典(青森市)・松本宏(八戸市)・小野寺久美子(秋田市)・深澤禎彦(横手市)・工藤敏納(盛岡市)・大友敬敏(宮古市)・佐藤敏彦(宮古市)・及川和夫(北上市)・浦島康弘(大船渡市)・金子泰雄(山形市)・鈴木信一(酒田市)・國分容子(福島市)・只野裕一(相馬市)・福井丈夫(新潟市)
- **監事** ……白木進(仙台市)・浅野ひとみ(仙台市)・菅野雅之(仙台市)
- **顧問** ……平河内健治・星宮望
- **参与** ……佐々木俊三・齋藤誠・辻秀人・原田善教・菅山真次・高木龍一郎・伊達秀文・佐久間政広・日野哲・佐々木哲夫・千葉昭彦・植松靖夫・石塚秀樹・前田修也・中川清和・佐々木郁子・松澤茂・木村安博
- **事務局長** ……門脇邦知
- **事務局員** ……武田三子雄・佐藤光男・丹野光雄・横山伸一・高橋明菅・井研二・階堂哲・土田恵介・小原武久・駒板高明・渡邊義春・草野正聡

ORGANIZATION 教学組織図

平成24(2012)年4月1日現在



東北学院大学

土樋 キャンパス	大学院：文学研究科、経済学研究科、経営学研究科、法学研究科、法務研究科 学部：文学部、経済学部、経営学部、法学部(各3・4年)、夜間主コース 〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1 tel 022-264-6421(総務課) fax 022-264-3030(//)	多賀城 キャンパス	大学院：工学研究科 学部：工学部 〒985-8537 多賀城市中央1-13-1 tel 022-368-1116(庶務係) fax 022-368-7070(//)
泉キャンパス	大学院：人間情報学研究科 学部：文学部・経済学部・経営学部、法学部(各1・2年)、教養学部 〒981-3193 仙台市泉区天神沢2-1-1 tel 022-375-1121(庶務係) fax 022-375-4040(//)		

東北学院大学後援会通信 GROWTH(グロース) vol.21 ■本誌に関するご意見・ご要望をお待ちしております。

発行日/平成24(2012)年10月
 編集/東北学院大学後援会事務局(総務部総務課内)
 発行/東北学院大学後援会 〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1 tel 022-264-6411 fax 022-264-3030
 E-mail kouenkai@staff.tohoku-gakuin.ac.jp URL http://www.tgu-kouenkai.org/
 印刷/ハリウコミュニケーションズ株式会社

○GROWTH(グロース)の意味は、「成長する」です。聖書には、「どんな種より小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」(マタイによる福音書13章32節)、また、「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」(コリントの信徒への手紙一3章6節)と記されています。東北学院大学の学生の皆さんが各分野において、知識や技術、教養を十分に修め、神と人に視されつつ大きく成長するようにという期待が本誌に込められています。

【本誌における個人情報及び掲載記事の取り扱いについて】本誌に掲載されている個人情報は、本人の了解のもとで本誌に限り公開しているものです。よって、第三者がそれらの個人情報を別の目的で利用することや、本誌の無断転載はお断りしております。
 【個人情報保護法への取り組みについて】平成17年4月1日より「個人情報の保護に関する法律」が施行されたのに伴い、東北学院大学後援会では個人情報の取り扱いについて、学校法人東北学院が制定した「学校法人東北学院個人情報保護規程」にのっとり、個人情報の適正な管理と保護に努めています。後援会事務局では、東北学院大学後援会の運営に必要な皆様の個人情報をお預りしていますが、今後も個人情報保護法に基づき慎重に取り扱っておりますので、皆様方のご理解・ご協力をお願いいたします。なお、後援会事務局で使用している個人情報の利用目的は次の通りです。
 ●保護者のための大学ガイド並びに「後援会通信「グロース」」の発行・送付 ●後援会総会並びに「地区後援会」の案内 ●その他、上記に関連する業務

